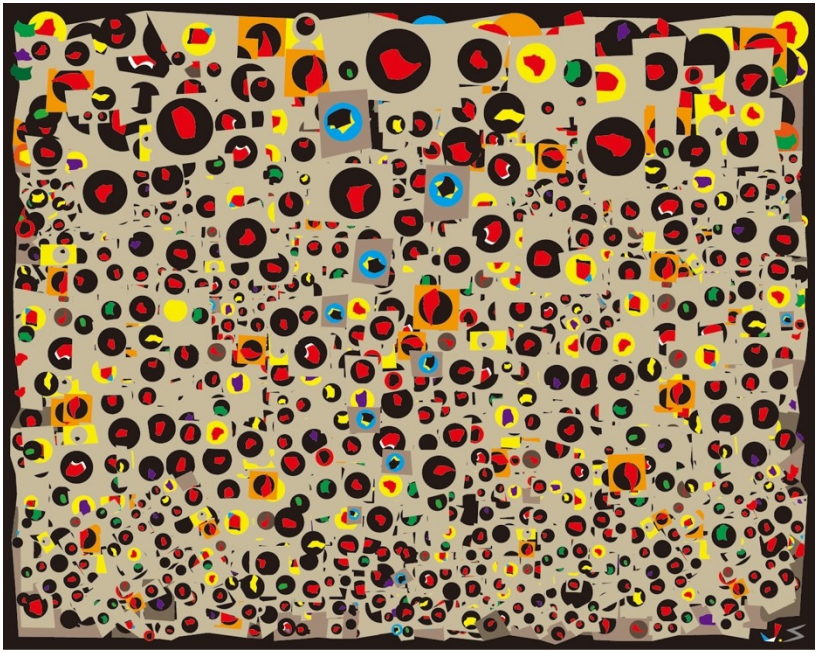
詩誌 立彩

Rissaí: A Journal of Poems



第 26 号
2024 年 9 月

目次

伊東友乃　きみが目を閉じたとき　2
関根全宏　生活のまっただなかで　4
　　ある移住者による自給自足の記録　6
　　あの話の続きを　10
岩間朱寿　満月の夜　11
　　横顔　12
　　喫煙所　13
永松佑香　ラムネ瓶を開けたなら　14
渡辺信二　真夏の記憶を巡って　3篇　16

表紙原画
鈴木順三　「ロックマニア1」（表紙）
　　「ロックマニア2」（裏表紙）

きみが目を閉じたとき

伊東友乃

きみが目を閉じたとき
金木犀の匂いはまだ　雨粒とともにあって
たちのぼる　甘ったるさが
道のむこうまでを　染めあげる
きりっぱなしの髪が
うつむいたきみの横顔をかくして
草原は　ずっと　遠くに
煙っている
どんなにくりかえし生きても
出会えない
たった一枚の
なだらかなプレートみたいに
今日の空は
今日というなかで
きみのなかで

止まった時間を映し
水たまりを　いくつも揺らしてゆく

生活のまっただなかで

関根全宏

ひとりのかなしみを
はげしくかなしむとき
そのあとには何が残るのだろうと
わたしは問われている
人身事故で遅延した電車を待つホームで
蓋のないペットボトルが落ちている歩道で
空っぽのバス停で
昨日見た夢の中で
屹立をくりかえし
ふるえる覚悟で
悔い
満員電車に
いくたびも揺られ
誰の声も響かない
新宿高層ビルの黒光りを見やる

この生活のまっただなかで
わたしは密かに問われている

ある移住者による自給自足の記録

関根全宏

そんなに凝視(みつ)めるな　わかい友
自然が与へる暗示は
いかにそれが光耀にみちてゐようとも
凝視めるふかい瞳にはつひに悲しみだ
——伊東静雄「そんなに凝視めるな」

一

白木山　標高八八九メートル
腰掛岩から眺める瀬戸内海の絶景
頂上から眺める周防大島のくびれ
その先にみえる瀬戸内アルプスの稜線

二

薄明　菊芋を焼いてみる
焼いてみると蜜のようにベタっと耀き
まるで高級な味醂を塗ったかのように甘かった
柑橘は休眠期のためひたすら剪定

三

出先から戻ると玄関先に筍が二本置いてあった
電話の主によれば
椎茸の菌打ちを手伝ってくれという
先払いの報酬だ

四

剪定した木は燃やしたものの大量の石が出土
さながら遺跡発掘
カボスも最後の収穫
来季への祈りを込めて灰を撒く

五

メバル　アジ　ホゴが届く
切り株に生えた原木椎茸と大漁桜の枝も入手
荒地を耕した代償として膝が疼く
剪定した木をさらに燃やして日々消光

六

丘の上から東京の街を幻視する

風に耳を澄ませる　揺れる
ながれるものに思いを馳せる　再び
この地は豊かだ

七

草の葉と蔓植物に支配された温室は
ヤモリやトカゲでひときわ賑やかだった
はじめから植えられていた山椒の木の隣に
東京から持参した山椒を休眠期のうちに植え替える

八

それからトタンを撤去する
テントウムシの楽園　ニホントカゲの成体も二匹
こちらの声を聴くかのように息をひそめ一時停滞
土は思った以上に柔らかい

九

日陰にミョウガを植える　畝を十本立て
森をイメージして通路に落ち葉を撒く
東京から三人の来客あり
河津桜の見頃までもう少し

十

シジュウカラ　ホオジロ　メジロ　カワラヒワ
野鳥を見つけて歩く　夕餉の食材も入手
ミツバ　フキ　ノビル　シャク　イタドリ　クレソン
海岸線を歩く　膝がなお少し疼く　海が耀いていた

あの話の続きを

関根全宏

ぼくはきみにあの話の続きを話した
でもきみは　何の話かと訊いてきた
真面目な顔で
　　それならぼくは
　　夢のそとで生きているのだ

満月の夜

岩間朱寿

満月の夜に街灯は必要ない
影が出来るほどに明るいから
太陽が作る影よりも妖しげで
柔らかな影が踊る
一等星のワルツに乗せて
月と一緒にどこかへ行っても
きっと誰も気付きやしない
影と私の誰も知らない夜の舞踏会

横顔

岩間朱寿

まだ人気のない朝の校舎
たとえ真っ暗でも転ばないくらいよく知った階段を駆け上がる
はやく行きたい気持ちのせいで足は早くなり息も上がる
三階に着いたら立ち止まって耳を澄ます
今日も聞こえる
足音をたてないように静かに廊下を歩く
少し明るくなった廊下のその先の教室から音楽が聞こえる
そっと教室に入ると
教卓に座って俯いたままの君がギターを弾いている
その横顔を独り占めしたくて

そろそろ君の横顔に朝日が射し始める

喫煙所

岩間朱寿

スコールで出来た水溜まり
消えそうな三日月と
君の燻らせたタバコの煙が滲んでいる
連絡先は持っていない
また会えたねって　スコール急だったねって
ここで会える偶然だけで君と話ができる
次いつ会えるか分からないから
ふわりと夜空を霞ませながら
なるべく長く煙を吐いて燃えていて
ずっと煙を吐いて燃え尽きないで

ラムネ瓶を開けたなら

永松佑香

ラムネ瓶の底を目において
下から覗いてみた
まるで自分が海の中にいるみたいで
なんだか泳いでいる気持ち

ラムネ瓶のビー玉を取って
口の中に含んでみた
ほんのり甘酸っぱい味がして
なんだか青春している気持ち

口に含んだしゅわしゅわが
弾けて飛んで
暴れまわった

ああ、また夏が始まる

炭酸のような
刺激的で爽快な夏が

真夏の記憶を巡って　3篇

渡辺信二

1

生命を知る必要はない
おまえが生命だから
人生を知る必要もない
おまえの足元を行く風のように
日々が過ぎ　そのままに
明日は明日　新しい人生がある
おまえの存在
そのものが一雫の光

ぼくらの乏しい生活を潤し
とても有り難く
豊かさとは何かを教え
叶わない美しさを示す
そして　枯れる
一夏の記憶

2

それは　ぼくらの
傷心の定めを
なお　祝福しようとする

空高く　雲白く
風爽やかと　それは　伝える
少年少女が　誘われて
ぼくらに笑いかける

確かに　笑いかけ
確かに　記憶に残る
だが　ぼくら　振り返る勇気なく
祈り求めること　できず

おめおめと　日が暮れてゆく
その周りには
少年少女の笑顔が　残光に似て

3

おまえがそこに咲くとは　驚きしかない
そこは　土砂の崩れた場しょだから
ぼくらより遅く生まれて
早く去るおまえが
期待を超えて
真っ直ぐに
激しくも
花開く

黄色

一粒から
直線となり　萼
花弁　同心円　舌状花
管状花と　螺旋状に種を広げていった

来年も　おまえ　この場しょに戻り　咲け

寄贈詩誌・詩集等は下記『立彩』編集室宛てにご送付をお願いできれば幸いです。

〒173-8602
東京都板橋区加賀 1-18-1
東京家政大学人文学部　関根全宏研究室気付

★詩誌『立彩』のホームページを開設しました。バックナンバーも閲覧できますので、下記 URL および QR コードよりご覧ください。

https://sekine-ma.wixsite.com/rissai

2024 年 2 月 1 日から 2024 年 7 月 31 日までに贈られた詩誌等一覧

詩誌

『コールサック』117 号、118 号。
『白亜紀』169 号。
『GATE』37 号。
『りんごの木』66 号。
『橋』170 号。
『万河・Banga』31 号。

歌集

『火種』4 号。

詩集

ロバート・フロスト『西に流れる川』藤本雅樹訳、小鳥遊書房、2024 年。
網谷厚子『ひめ日和』思潮社、2024 年。

その他書籍・論文・エッセイなど

松本和也編『翻訳としての文学――流通・受容・領有』水声社、2024 年。
加藤祐三『幕末外交と開国』講談社、2012 年。
日本エズラ・パウンド協会『Ezra Pound Review』26 号。

詩誌『立彩』第 26 号　2024 年 9 月 20 日発行
頒価 300 円
編集発行　「立彩」
　〒173-8602　東京都板橋区加賀 1-18-1
　東京家政大学人文学部　関根全宏研究室気付
印刷　株式会社 DTP 出版　TEL 03-5621-4531